大峰奥駈道

靡き（なびき）と呼ばれ、神仏が宿ると言われる 75 か所の拝所を修行場としての修験道の古道を歩いてみよう。実行時期や、スタイル（テントか小屋泊まり）日照時間が長く、暑くなる前、天気の安定している今が、チャンスと思い、敗退を覚悟で実行した。

大峰山脈の北部は、岩場があり、標高も高く変化に富んで楽しめたが、南部は、通常の縦走とは違う雰囲気を感じた。女人結界門があり、吉野から入れなかったが、充分な充実感に満たされました。

【山域】近畿、大峰山脈

【ルート】大普賢岳～大峰奥駈道を逆峯（吉野～熊野に南下）

【登山方法】テント縦走

【メンバー】単独

【行動日】5/31～6/6

【内容】

5/31 新宿駅 22:54⇒6/1 近鉄大和八木駅 7:00⇒大和上市駅⇒大台ケ原行バス 9:00⇒和佐俣登山口下車 10:30－沢コースー大普賢岳登山口 12:12－笙の屈 13:13－大普賢岳 15:00－七曜岳 16:25－行者還岳手前の鞍部 17:25 幕営

夜行バスで奈良に向かう。翌朝電車、バスを乗り継いで大普賢岳の登山口がある和佐俣で下車、林道から沢コースを和佐俣ヒュッテ迄歩く。沢から尾根に上がるところを見逃し、5 分ほどロスして、大普賢岳登山口に到着。和佐俣山はパスして、緩やかな尾根を詰めると、絶壁の襞を、梯子や鎖を伝い笙ノ窟に出た。ここは、役行者の冬籠りの行場との事、不動明王が祀られ、冷たい水が絞れ出ている。大汗を流していたので、この水で生き返った。ここで、2、5 リットルの水をいただき補充する。この後、幾つもの鉄梯子を喘ぎながらやり過ごす。修行の始まりだった。途中、これから向かう大峰主稜の展望や、シャクナゲの花に、元気づけられ小普賢岳をスルーして、大普賢岳の鞍部で奥駈道に合う。一登りで大普賢岳の山頂に立った。

バスタ新宿

笙ノ窟

北の方向に、女人結界門のある山上ヶ岳方面を望む。笹原の緩やかな尾根を進み、稚児泊ノ宿跡に来た。行者還小屋に届かない時は、ここに泊まるつもりで、水を担いてきた。

まだ日が高いので前進したが、国見岳から七曜岳付近のルートの厳しさは、緊張の連続だった。七つ池を過ぎると間もなく七曜岳の山頂を踏む。どっしりと構えた稲村ヶ岳が、すごい迫力で対峙している。七曜岳を越すと緩やかな稜線で、どこを泊り場にするか、時計を見ながら快適に歩き、行者還岳手前の鞍部を泊り場にした。

シロヤシオの尾根

七曜岳付近～大普賢岳を振り返る

崖の通過

バス停で一緒に下りた年配の男性に、無鉄砲な計画と言われ、不安は膨れ上がっていたが、ほぼ自分の想定内に進めたことにほっとし、不安は消え、まず初日は、クリアーできた。落ち葉の敷布団で快適に眠れた。

6/2 幕場 4:45－行者還岳 5:09－弥山 9:06/9:26－八経ヶ岳 9:59－楊子ノ宿小屋 13:05－釈迦ヶ岳 16:26－千丈平（かくし水）17:20 幕営

出発して間もなく、行者還岳の巻き道になる、ここは、山頂経由で行く。樹林帯で展望はない。行者還小屋手前に水場があった。小屋を通過して、なだらかな稜線を進む。背丈の低い笹原に、シロヤシオが清楚に丘を飾り何とも気持ちが良い。奥駈道出会に来ると、行者還トンネル登山口から八経ヶ岳への登山者、ツアー客が、溢れかえり、静かな山はおあずけです。過って、自分もこのルートで八経ヶ岳をピストンした。その時は、オオヤマレンゲの花の時期だった。弥山の登りで、振り返り、大普賢岳、小普賢を望む。唯一食事のできる弥山小屋や八経ヶ岳を通過すると、人波は消え、又、静かな山を取り戻す。

八経ヶ岳山頂

巨大なシロヤシオ

明星ヶ岳は、気付かないうちにスルーしていた。これから暫くは、木陰のない稜線歩きで、暑くげんなりしていたところ、すれ違いの男性から、もう下るだけだからと言ってアクエリアスのシャーベットを頂き、生き返った。サングラスをかけ、海賊みたいな格好を

していた。うれしかったですね！この先、崩壊場所を通過し、楊枝ノ宿小屋に到着。ここは小屋裏に豊富な水があったが、泊まるには早すぎるので、先へ進む。仏生岳の 200m の登りはきつかった。トウヒなどの針葉樹の樹林帯を進み、鳥の水場は、湿っている程度で涸れていた。前方に大岩郡が見え、ここにも、絶壁に・・・ノゾキ場があったが修行の場であろうか？この先岩場の登りに入る。岩場の通過は、変化があり、それなりに楽しめる。登りきると釈迦の銅像が、天を付くように建っていた。

釈迦が岳

岩壁の奥に仏生ヶ岳

釈迦如来像

一人の強力が、運んできたと言うらしいが・・・このような岩場に！想像すらできない。今、歩いて来た山波を北に見る。振り返り、南奥駈の大日岳の展望を後に、深仙の宿へと下る途中、すれ違いざまに、深仙ノ宿の水は、乏しいとの事、かくし水のテント場の情報を入手した。スマホの地図を見せ教えてくれ方に感謝です。翌日、深仙ノ宿に泊まった人の話では、1 リットルを汲むのに 3 分かかったそうだ。奥駈は、何時も、水の入手を心掛けなければならない。

ルートから 10 分下った所に、良いテント場があり、水が豊富に流れていた。五張の先着者の仲間入りした。夜、月明かりが森を照らし、幻想的な景色をかもしだしていた。